

「主は羊飼い」

ヨハネによる福音書

第10章7節～18節

説教 岡村 恒牧師

「わたしは良い羊飼いである」と、主イエス・キリストはこの日、ご自分が何者であるかを、はっきりと描き出して下さいました。

あなたはいったい誰ですか、と主イエスに問いかける人が後を絶ちませんでした。今日でも、世界中で聖書を手にする人々が、皆一つの答えを求めています。主イエスの答え、そして聖書全巻が語る答えは明瞭です。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(11節)これ以外の答えなどないのです。

今朝の御言葉には、《ejgwv ejjmi(エゴ・エイミー)わたしは～である》という言い方が4回も出てきます(7、9、11、14節)。当時の人々には、この特別に強調した言い方が心に強く残ったに違いありません。命がけで羊を守り、羊を生かす良い羊飼いのイメージが、はっきりと心に刻みつけられたでしょう。

今日、一緒に交読した詩編23編を指差して「わたしがあの羊飼いだ」と言うように、主イエスはお語りになります。口語訳聖書では、「主はわたしの牧者であって…」と牧者の前に「わたしの」という言葉がありますが、新共同訳聖書では「主は羊飼い。」(新共同訳聖書詩編23編1節)となっていて、「わたしの」がありません。主イエスが、このわたし一人の羊飼いであるよりはむしろ、多くの羊の群れを養う羊飼いであることが伝わってきます。主ご自身が、「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。」(16節)と言われ、「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」(同)と言われたのです。主イエスの元で、多くの羊が一つの群れとなることをお示しになりました。

律法学者やパリサイ人という聖書の専門家たちは、神様のみ心も、主イエスがいったい誰なのか、少しも理解することができませんでした。主イエスは、この人々のことを指さすようにして、「わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。」(8節)と言われました。彼らには、羊を命に導いたり、羊の持ち主である神の元に連れ帰ることができないからです。しかし主イエスのご自分のことを、羊の囲いの門だと言われました。主イエスを通して、緑の草原に行き、命の水の泉に行き、また帰ってきてそこで命が守られるからです。

ご自分が門であり、良い羊飼いであると言われた主イエスはこの日、地上に来られた目的に

ついてもしっかりお語りになりました。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」(10節)命を奪う盗人や強盗ではなく、命を与え、豊かに与える良い羊飼いとして、主イエスは来られたのです。

厳しい迫害の中にあつた初代教会は、ちょうど狼に襲われる羊の群れのようにした。罪と死の奴隷となって、悲しみと恐れを抱く私たちも同じような姿をしています。しかし主イエスは、羊の群れを見捨てたり、死と滅びの中に投げ出したりなさらないのです。むしろ、ご自分の命を捨ててまで、羊の命を守り、生かして下さいます。

ですから、14節は私たちに深い慰めを与えてくれます。「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」(14節)この「羊」というところに「あなた」という言葉か、あるいはご自身のお名前を入れて読んで下さい。主イエスはあなたのことをご存知なのです。顔も名前も、どういう心の重荷を負い、悲しみを負っているか。心の一番の深みにある不信仰な思いや深い闇も全てご存知なのです。私たち一人一人の罪深さを誰よりもご存知なので、私たちのためにご自分の命を差し出して、私たちの赦しを得る代償として神にお捧げ下さったのです。そして、《あなたもこの私を、あなたの羊飼いを知っているだろう》と言われ、《私の声を聞きとって私の元に来て命を受けなさい》、と主ご自身のみ元に招いて下さるのです。

主イエスは、ご自分の命の最後の一滴さえもご自分のために取っておくことをしないで、私たちのために与え尽くして下さいました。囲いの外にいるような神からほど遠い私たちのためにこそ、主イエスは命を捧げて下さったのです。

この世の目に見えるものや、様々なものを私たちは自分の羊飼いであるかのように思い違いをします。しかし、本当の命にいたる門は一つ、良い羊飼いはただお一人、主イエス・キリストだけです。「死の陰の谷を歩む」(詩篇23篇4節)私たちと共に、「わたしは羊の門である」「わたしは良い羊飼いである」という主イエスが歩んで下さいます。ご自分の羊を、とこしえに主の宮に住まわせるためです。「わたしは《あなたの》良い羊飼いである」という主イエスの強烈な宣言が、今ここでも、響いています。

(記 岡村 恒)